

Title	巻頭言 社会福祉の理念の普遍性と今後の社会展望：東日本大震災のこのときに思う
Author(s)	牛津, 信忠
Citation	総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.1, 2011.6 : 1-1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3068
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

社会福祉理念の普遍性と今後の社会展望 ——東日本大震災のこのときに思う

東日本大震災のもたらした惨状に接し、社会福祉の「共生」「共育」また「共苦」「共楽」という言葉が脳裏に焼き付いてくる。それなくしては現実に人間生活が不可能になる状況を見せつけられ、その当たり前さを改めて思い知らされる。社会福祉は、震災の時に限らず、こうした生き方・在り方を公的・私的に実践し、生活ニーズの不充足・不調整のある「人の生の場」に対して「支援・回復・予防」の働きかけをしている。

通常の社会生活のなかでは、こうした在り方は単なる絵空事に見える。しかし大震災の生じた日本においては、上に述べた人間の肩を寄せ合った生き方が日常のなかで明確な位置づけを持つことを再認識させられる。

原発問題を引くまでもなく、福祉にいう問題予防の視点がなんと等閑であったことかと嘆かれる。想定外が現実になったときに、その危機意識の希薄さと、問題予防力の脆弱さに驚く。それは人間が生きることとその生活基盤構築をあまりにも軽く考え、経済の効率基準に想定を限る在り方に過度に依拠した結果である。

今なすべきことは、人間存在の本来の在り方に添って社会を、特に「経済主義」のみに依拠するこの経済社会体制を再考、再構築していくことにある。そのために心を接した生活福祉を実践のなかから汲み取り、今、この現在に困難を背負う人々のところから、そこからの離脱のための支援や回復とともに、社会福祉の原点に帰って人間の生活問題への対応体制を問い、その予防的方途をも明確にしてゆくことが緊要である。

それは経済体制の中に、真の福祉主義を注入することを意味する。

かつてエドアルト・ハイマンが、資本主義も共産主義も、経済（主義）体制であると一括りして、そこから離脱して善き生活「Good Life」を目ざすという「統合社会体制」へのビジョンを描いた。それによると経済（主義）体制は福祉国家や改革された社会体制を経て新たな体制に到る。そこでは参加し合って文化価値の創造をなす文化経済が成立し構造化する。その中心に福祉文化とそれを支える福祉経済があるという理解も可能である。とするならば、そこにおける企業の営みの内部には明確な善き生活、善き人生への希求性を包摂することになる。それは、あのmore and more（拡大主義）やそのための効率主義、また自己、自集団、自国にのみ中心を置くミーイズムからの脱却、さらには人間による判断の限界を忘れた「理性信仰」を問い返す。また関係性の中における個と共同の融和的在立を支える「相互律」（難波田春夫）を常態化することも求められる。

しかし近代を支えてきた拡大や効率、また個（自己）への執着を、現代人、現代社会は完全に捨て去ることは困難であろう。それでも、用心深くこれと付き合うことはできる。その用心深さを支える思想に触れておく。

その思想とは人間尊重の基本姿勢である。それは表面だけの人権論を越えた「人格主義」を基礎とする人間と社会への視点である。

ここに「人格」というのは、マックス・シェーラー流の人格を意味している。つまり「そこに見えている自我上の人格」を越えた、「見えないその人の内なる可能性」として永遠に続く人格をいう。われわれは、この内なる人格尊重の道に立つことにより、人間を物象化する経済主義から脱却していくことが出来る。特に人間とその社会の構築・運営等の対応姿勢を考えると、それは、そこに生きる人を物化的対象化して安易な判断を下すことなく、人間相互が真に生かされ合う道を対人的に社会的に探る行動基準の基礎を与えてくれる。

こうした在り方が、この大震災に直面した今、素直に思念されうる。既に阪神淡路においても、さらに溯って二次大戦の「戦災の後」等と、多くの時が与えられたのだが、これを教訓にできず、のど元過ぎれば熱さを忘れてきた。

犠牲に遭われた方々が身をもって教えて下さったことを、今回は決して忘れてはならない。この厳密に言えば「近代への警告」を忘れることなく、新たな歩み出しをなさねばならない。善き生活へ向かう「人格主義的な統合社会体制」とその現段階で考えられる福祉社会づくりを進めねばならない。それは人と人が可能性を求めて生き合っていくなかで他者の人格への参与（「存在参与」）を通じて相互に生き合っていくことから始まる。

たとえ試行錯誤の揺れの中にあつたとしても、こうして近代の残像との相克とその軌道修正を繰り返し、「統合社会体制」を、さらにその先の社会への展望を交えながらたぐり寄せてゆけることを切望したい。